ジュエル！

asobito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジュエル！

【Ｎコード】
Ｎ５１６６Ｚ

【作者名】
ａｓｏｂｉｔｏ

【あらすじ】
オレの名前は一条（はじめ）初。下校途中外国人の美女が車に轢かれそうだったので助ける為道路に飛び出したとこまでは覚えてる。でも気が付けば赤ん坊に、しかもその美女が母親！？え？オレ人間じゃないの！？地球ではない異世界で新たな人生を歩むことになったハジメの物語。
素人の初めての執筆なので色々問題が出てくること必至ですが、完結できるよう頑張ろうと思います。誤字脱字その他気になったところがありましたら教えてもらえると助かります。

プロローグ

オレの名前は一条初(はじめ)。田舎町に暮らす普通の高校2年生。外見は中肉中背で顔は・・・まぁ中の下くらいなんじゃないかな。可もなく不可もなくって感じ。勉強も運動もそつなくこなすタイプ、飛び抜けてなにか才能があるわけでもないので友人からは「器用貧乏」とか言われたりもするが。まぁ「どこにでもいる普通の高校生」っていうのが一番わかりやすいか。趣味は映画鑑賞、ゲーム、友人達と旅行に行ったりするくらい。

両親はオレが中学の時に事故で他界。それから親戚の叔父さんの所に世話になってたけど高校に入って一人暮らしを始めた。叔父さん達に世話になりっぱなしも気が引けるというのが一番の理由かな。親の残してくれたお金があるけど将来の為にできるだけとっておきたいのでバイトをして生活の足しにしている。金銭的なこともあるし、高校卒業後はどこか就職するかなぁと大雑把な将来設計を考えてる。

そんな高校2年生の秋にその設計を根本からぶち壊す出来事が起きる。

「いや、マジでシャレにならん・・・。」

「まぁ自業自得ってやつだな。補習がんばれ。」

下校途中のオレの横でこの世の終わりみたいに顔を青くしているのは親友のサイトー。原因は先週やったテストが壊滅的で明後日から補習が盛り沢山になったことだ。周りがテストだ勉強だって言ってる時に連日徹夜でゲームしてクリアしたことを自慢してたバカにつける薬はない。まさに自業自得だ。

「はぁ、めんどくせー。ん？あ、そうだ今日新刊でるんだった。わりいちょっと待っててくれ！」

本屋の前を通り過ぎようとしたらそう言ってサイトーは本屋に駆け込んでいった。アイツがマンガ以外読んでるとこ見たことないしきっとマンガ買いに行ったな。ツッコミたい事はあるがいつものことなのでもう諦めている。また周りでアイツの勉強のフォローすることになんのかなぁと溜息を吐きつつ何気なく周りを見渡す。

「ん？外人か、あの人。」

横断歩道のど真ん中に金髪の美女が突っ立っていた。ちょっと離れている上にこちらからは横顔しか見えないが明らかに美女だ。服装は質素な白いシャツとグレーのロングスカートで着飾ってる感じじゃない。美女はまったく動こうとしない。

「あれ、まずくないか・・・。」

危ないことを知らせた方がいいかと歩き出すが、すぐに歩行者信号が点滅し赤になる。それでも美女は動かない。車道をみると車が交差点向かって走ってくるのが見える。スピードを下げるわけでもクラクションを鳴らすわけでもなく何事もないように交差点を通り抜けようとする。

「マジか！？くっそ、間に合うか！？」

全速力で横断歩道に向かう。車はすぐそこまで来ている。横断歩道に飛び込み美女をこちらに引き寄せようと手を伸ばすが空を切る。

「は？」

掴もうと伸ばした手が美女の体をすり抜けた。ありえない状況に思考が止まってしまう。

プァァァァァアアアアアア！！！

「初っ！！！」

車のクラクションとサイトーの声で我に返る。だが、車はもう目の前に来ていた。

「あっ・・・・。」

体に衝撃が伝わる瞬間目の前が真っ暗になった。

プロローグ（後書き）

はじめましてａｓｏｂｉｔｏです。
とりあえずプロローグはできたので投稿してみようと思います。続きも形になり次第という見切り発車もいいとこですが楽しんでくれる人がいたら幸い。

第1話　初の終わり　ハジメの始まり

暗闇の中フワフワと浮かんでいる感覚。体は全然動く気配がせず意識もボンヤリした状態。ただ心地の良い温もりに包まれている。

（オレたしか車に轢かれたんだっけ・・・。）

思い出そうとしても頭が働かない。

（轢かれた瞬間意識飛んだからよくわからんが、やっぱり重症なのかな。あーダメだなんか眠い・・。）

しばらくするとまた意識が戻り少しだけ考え事ができる。

（オレどれくらい入院するんだろ・・。1年くらい学校行けなかったりするのかな。そういやサイトーのやつ補習どうなったかな。あー、そんだけ休んだらオレ留年じゃないか？うわ、最悪だ・・。）

そんなことを考えているとまた激しい睡魔に襲われて再び眠る。

それからどれくらい経ったか、急に包んでいた温もりごと激しく体が揺さぶられる感覚に襲われた。どこかから声が聞こえる気がする。それも何人もの声。

（なにか聞こえるけどなにがおきてんだ。ん、なんか押し出される感じが・・・え、ちょっと誰だ引っ張ってるのはっ！？うおっ！！）

「さぁ！奥様！もうひと踏ん張りですよ！頭が見えてきました！！」

「がんばれ！もうひと踏ん張りだ！よし、なにかオレにできること

はないかっ！！」
「なにもありません！というかそこ邪魔です！！奥様を励ましてくださいっ！！」
「む！そうだな！そういうことならば全力で励ますことにしよう！！」
「～～～～～～～～～！！」

温もりから引きずり出され急に明るい場所に出された。あまりの眩しさから目がくらんでいたが次第に視界が広がっていく。目の前には４０くらいのおばさんがいた。首と腰あたりを支え持ち上げられると同時に歓喜の声を上げる。

「奥様！生まれました！男の子ですよ！！」

ここにきて初めて自分の状況を理解する。ありえないとしか言いようがないが自分が今生まれたばかりの赤ん坊だと気付いた。

（えええええええええええええええええっ！）

声に出そうと思っても出てくるのは鳴き声だけだった。赤ちゃん特融のあの泣き声。

「おお！元気な泣き声じゃないか！これは将来が楽しみだな！」
「旦那様は気が早すぎますよっ。さ、奥様お抱きになってください」

赤ちゃんを抱き満面の笑顔を向ける女性。優しさに満ち溢れている母親の顔を見て初はさらに驚愕する。その女性は横断歩道で立っていた金髪の美女だった。

（はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？）

もちろんこの声も鳴き声でしかない。周りから見れば元気に泣く生まれたての赤ちゃんだ。

「ふふ、私があなたのお母さんよ。これからよろしくねハジメ。」

そういってハジメの頬を指先でそっと撫でる。だが本人はあまりの驚愕にそれどころではなかった。しばらく泣いていたが、また睡魔に襲われ眠りにつく。それを大人たちは笑顔で見つめていた。

第1話　初の終わり　ハジメの始まり（後書き）

まとめてプロローグにすればよかった気がしないでもない。生まれてくる赤ちゃんがどういう感覚なのかは想像です。

第2話　0～3歳児の考察と衝撃の事実（前書き）

２０１１／１２／１９　家政婦の２人がさん付けだったので直しました。

第2話　0～3歳児の考察と衝撃の事実

驚愕の誕生から数週間。まだ身動きは取れるはずもなく小さなベッドの中でゴロゴロする日々を過ごす。生まれた時より物事を考えられるがすぐに眠くなってしまうのは脳がまだ発達してないからだろう。いわゆる食っちゃ寝生活だがとりあえず現状を把握するべく小さな脳をフル活動させる。

（まず現状としては、オレは今赤ん坊だ。ってことはあの事故でオレは助からなかったってことなんだろうか。でもなんであの女の人が無事な上にオレの母親なんだ・・・さっぱりわからん。それにここはどこなんだ。洋風な家の作りみたいだし、あの両親もどう見ても外人だよな。ここって外国なのだろうか。）

そんなことを考えながら周りを見渡す。木造建築の素朴な部屋。今寝ているベッドは木製だし近くに置いてあるおもちゃも木と布しか使われてない。がんばってベッドの端まで行って床を覗き込んだが木の板を並べただけ床だった。ここまで徹底した木造建築は田舎町に住んでいたハジメにも珍しいものだった。

（まったくコンクリートとか使ってないのか。どんだけ田舎なんだここ・・・。）

かなり年季のかかった感じのする家だが決して汚いわけではない。家政婦の人が毎日掃除しに来ているのを確認済みだった。家政婦の一人で10代くらいのかわいらしい女性が掃除の合間にやたらとハジメの所にきてかわいいかわいいと頬や頭を触ってきた。初めは嬉しかったりしたが、さすがに部屋の掃除中10分間隔くらいで来るのはストレスが溜まりそうだった。3日目に他の家政婦に見つかっ

て怒られていたのでストレスが溜まることはなかった。

（家の事はこれ以上わかんらんな。もうちょっと成長して歩けるようにならないと・・・。）

そんなことを考えていると部屋に女性が入ってきた。

「あら、ハジメまた動き回ったのね。まだ数週間でこれだけ動き回るなんて大きくなったらわんぱくな子になっちゃうのかしら。」

そう言いながら顔を覗き込みそっと頬をなでる。生まれた時から変わらない優しさに溢れた笑みを浮かべハジメを見つめる。

（名前はクラウさん・・だっけか。自分の母親にさん付けもどうなんだろう。）

身長は１７０ｃｍくらい。髪は金髪で細身の体だが出るところは出ているモデルのようなスタイルだった。顔も整っておりじっと見つめる黒い目が意志の強さを物語っている。まさに美人と言って何の問題もないだろう。母親とはいえそんな外人モデルのような人が至近距離で笑顔を浮かべ顔をなでてくるのだからハジメは内心落ち着かない状態だった。

（自分の母親に緊張してどうするオレ！）

赤ちゃんなのに緊張で固まっていたが、抱きかかえられて子守唄（まったく知らない歌）を聴かせられたハジメは速攻で眠りについた。

「やあ！只今帰ったよ！」

爽やかな大声にふと目を覚ますとすぐにドアを開けて父親が入ってきた。名前はオルタス。身長は１８０ｃｍくらい、サッパリ整えた短めの髪で色は目と同じく黒。掘りも深くキリッとした男前だった。体格は細身だが筋肉がしっかりついていて細マッチョという感じだった。ハジメを確認するとサッと抱き上げクルクル回りだす。赤ちゃんのハジメには若干早すぎたので恐怖の為に体を強張らす。だがオルタスは嬉しくて仕方がないのかそのままジャンプまでしようとする。

「さぁ高い高いもセットだ！今なら低い低いもセットで高低差が倍だぞー！」

そう言って回転を維持しつつしゃがんだ状態から立ち上がって頭上まで持ち上げようとするオルタスの肩に後ろから手が掛りピタっと動きが止まる。

「アナタ、なにをやってるんですか？」

「あ、クラウ、ちょっとハジメを楽しませよ・・う・と。」

振り返ったオルタスがピタリと止まる。ハジメからはクラウの姿は見えないが明らかにオルタスが動揺しているのがわかる。すぐにハジメをベッドに戻し反省を口にする。

「すまない。ハジメの顔を見たらうれしくなってつい張り切ってしまった。」

「まぁ気持ちはわからないではないですが・・・。まだ赤ちゃんなのですから気を付けてもらわないと困ります。」
「そ、そうだな。まだ早かったな。」
（あ、いつかやるんですね・・・。）

あのテンションの上がりっぷりからその日がそう遠くないと不安に駆られるハジメだった。

それからしばらく過ごすと母のクラウに抱かれ、部屋の外出ることも多くなった。そうなると両親以外も家の中に数人いることがわかる。父と母の身の回りのことをしている男性。名前はラウスペムス。両親はラウって呼んでる。オールバックにした白髪に細面、細く鋭い目で色は黒。眉は白で口と顎には白い髭。一見年寄にも見えるが４０歳くらいだろう。服装はまさに執事。言葉使いも丁寧で立ち振る舞い、仕事っぷりも含め（赤ちゃん目線だが）絵に描いたような執事だった。

次に家政婦２人。ふくよかな女性の方が名前をモルヒラ。ハジメが生まれるときに産婆をしていたのも彼女だ。もう一人がヒルエ。見た目は１０代前半、小柄でまだ少女の幼さが残っている。２人は親子で髪と目は茶色、モルヒラは髪を団子状に纏めていて、ヒルエは後ろに束ねている。身長は２人とも１６０ｃｍ前後というところだろう。モルヒラが主に仕事をしていてヒルエはそのサポートをする見習いのようなものだった。家族３人に対して執事と家政婦２人とはどういうことなのだろうと気になったが言葉を喋れないので当分保留することになった。

家には庭もありテラスもあったのでそこで外の景色を楽しめた。見渡す限り森だったが。そして庭先にありえないものを見つける。馬車だった。しかも引いてる馬が見たこともない馬だった。全身が黒っぽく目が赤く、鬣が風もないのにゆらゆら揺らめいていた。火が燃えてるように。ここでハジメは自分の置かれた状況に確信を持つ。

（これは・・・地球じゃないな。地球上の生物すべて知っている訳じゃないが、鬣が黒く燃えてる馬なんて存在しないのはわかる！）

馬を凝視するハジメを見て「お馬さんかっこいいねー」とクラウは嬉しそうに頭を撫でた。

３歳になり今では自分で立って歩けるようになった。高校生だった初の頃の感覚で歩こうとするとすぐ転んでしまうのでゆっくり歩くようにする。本人は慎重に歩いているようでもフラフラしている様に大人には見えるので後ろにはいつもクラウか家政婦が付くようにしていた。喋ることも問題なさそうだが、普通の子供は何歳から喋るようになるのかをよく知らなかったので大人達が話しかけてくるのを片言で返事するところから始めてみた。両親を騙しているようで少し罪悪感を感じたが、いきなりペラペラ喋りだす子供にいい印象はないだろう。最初に言葉を発した時は両親が大喜びで父から＞高い高いデラックス＜（ハジメ命名）を１０回連続でされた。この頃には何度も受けて耐性も付いたので最初ほど恐怖はないが、年々回数が増えジャンプの高さも上がっているのでどうにかしないといけないなと新たな問題に悩んでいた。両親以外も言葉を覚えさせる意味合いでよく話しかけるようになった。

ラウ（自分の事をラウと呼ぶように言っていた）は両親を「父上」「母上」と呼ぶ事や家にある色々な物の名前を教えてくれた。あと何もないところからカップやスプーンやお菓子を出すマジックを見せたりしてくれて楽しませてくれる。モルヒラは子供の扱いには慣れていたので小さい子供をあやす典型的なおばさんスタイルでさすがに高校生にそれはないだろと思う事でも見た目3歳児のハジメは嬉しそうにキャッキャ言うしかなかった。ヒルエは下にまだ幼い弟妹がいるのでその感覚で接してくれた。一緒に庭に出て花や木を見たり一緒に遊んでくれたりした。

見たり聞いたりする事が増えたおかげでさらに色々な事がわかってきた。この家の周りは森になっているがすぐ近くに村がある事。モルヒラとヒルエもこの村で暮らしている。村自体にはもう何度か行ったこともあった。両親に連れられて散歩がてら村を見て回ったりしたからだ。石や木で作られた家が8軒ほど井戸を中心に並んでいた。ニワトリが放し飼いにされていたり牛がつながれていたりしていたがどの生き物も微妙にハジメの知っているものとは違っていた。人々が着ている服は質素でアクセサリーやオシャレとは無縁という感じだった。そして何より驚いたのが住んでいる村人だった。普通の人間の他にトカゲのような顔をした人や耳のとがった人、犬の顔をした人、髪や目の色も多種多様だった。ハジメは過去に見た映画やゲームの世界観を思い出した。多少の誤差もあるがあのフィクションの世界が目の前に広がっていた。

（ここはファンタジーな世界なんだな・・・。生活も映画で見た中世とかそんな感じだしな。）

村人はみな楽しそうに生活していてクラウとハジメが通るの見かけるとお辞儀したり、ハジメに笑顔で手を振ってくれた。ハジメもそれに手を振って応えた。

あと驚いたのは父オルタスがここの村長だということだった。それはオルタスと来たときに村人がオルタスを「村長」や「村長様」と呼んでいたからわかった事だった。つまりクラウは村長夫人、ハジメは村長の1人息子ということになる。村人が楽しそうに暮らしているので父は優秀な村長なのだろう。ハジメは改めて父を尊敬するようになった。

家で母と過ごしている時にずっと気になっている事を思い切って聞いてみる事にした。生まれた時から気になっていた事。3歳でそんなこと聞いて大丈夫か不安だったが片言で聞いてみる。

「なんで、なまえ、ハジメ？」

「ん？なんでハジメって名前になったか知りたい？」

クラウは微笑みながら首を傾げる。ハジメはコクコクと頷く。

「ある日ね、急にどこかからラッパの様な音が聞こえてきたの。それと同時にハジメ！って声が響いてきたのね。でも周りには誰も見当たらないしおかしいなぁと思ってたのね。でも次の日お腹に赤ちゃんがいる事がわかって、あぁあれは神様の声だったんだって思ったの。だから生まれた子の名前はハジメにしようと思ったのよ。」

その説明を聞いてハジメは目が点になり思考が止まってしまった。

（ラッパの音ってもしかしてクラクションか？ってことはハジメ！って声はサイトーか・・・。）

「ん～ハジメには難しかったかなぁ？」

キョトンとしているハジメの頭を撫でて少し困った顔をするクラウ。それにハジメは苦笑いをするしかなかった。バカな親友が名付け親な上に神様になってる事に対してだったが。

第2話　0～3歳児の考察と衝撃の事実（後書き）

ハジメ、大地に立つ。
3歳児までに知った自分の周りの事と思わぬ名前の由来。色々設定がザックリなのはご愛嬌ということで。もっと正確に伝わりやすくすることが課題ですね。がんばりましょうオレ。

第3話　5歳児が聴く自分の種族について（前書き）

２０１１／１２／１９　家政婦の２人がさん付けだったので直しました。

第3話　5歳児が聴く自分の種族について

「ハジメ坊ちゃん、朝食の準備できましたよ。起きてください。」
「ん・・・は～～い・・・・。」
「ほら、そう言って起きる気０じゃないですか！ちゃんと起きてください！」

家政婦のヒルエに上半身を起こされやっと目を開ける。眠りを貪りたいと訴える体を無理やり動かしフラフラ立ち上がるのを確認してヒルエさんは部屋を出て行く。

「ふぁ～～～～・・・ねむ・・・。」

ヨロヨロしながらもタンスに向かい寝間着から普段着へと着替える。茶色のズボンに白いシャツと紺色のベスト、革のブーツを履いて壁に掛けてある鏡で身だしなみをチェックする。黒い髪、目は黒だが光に当った時よく見ると紫色になっているので限りなく黒に近い濃い紫なのだろう。これは父も母もそうだった。じっくり見ないと気付かないが。

顔立ちはさすがあの両親の息子という整った顔立ちでまだ5歳だが将来はイケメンになるのだろうなとハジメは考えていた。ここにサイトー（過去に好きだった娘がイケメンと付き合っていた事がありアンチイケメンになった前世の親友）がいたら「イケメンマジ死ねっ！」と掴み掛ってきただろうなとニヤニヤしている自分の顔に気付きすぐに元に戻して部屋を出て食卓のあるリビングへ向かう。

「おはようございます。」
「やぁハジメおはよう！」

「おはようハジメ。」
「おはようございます坊ちゃん。」
「おはようございます。朝食は用意できてるんで顔洗ってきてくださいまし。」
「おはようございますハジメ坊ちゃん」

ドアを開けて挨拶すると父、母、ラウ、モルヒラ、ヒルエと挨拶が帰ってくる。モルヒラに促されるままリビングを抜け隣のキッチンに入り外の井戸に向かう。丁度裏庭にあたる場所にある井戸で顔を洗いすぐ近くの馬小屋から顔を出す黒い馬に声を掛ける。

「クロ、おはよう。」
「ヒヒンッ」

鬣が火のように揺らめいている黒い馬は名前をクロフレイアと父から教えてもらったがクロと呼んでいる。クロが嬉しそうに挨拶してくるのを確認して家の中へ戻る。テーブルには朝食が準備されラウがハジメの席のイスを引き座らせるとラウと家政婦の2人も席に着く。食事は皆でするのは昔からのルールらしい。ラウに聞いたところ世間的には家政婦や執事が一緒に食事するのは珍しい事らしい。日本の一般家庭しか経験のないハジメにとってはむしろこちらの方が普通だったのでなんの違和感も感じなかった。

食事を終え片づける為に家政婦の2人やラウが席を立ち、ハジメも席を立とうとするとオルタスが話しかけてきた。

「ハジメ、今から大事な話があるから聞いてくれるか？」
「え、あ、はい、わかりました父上。」

浮かせた腰を下ろしオルタスを見る。オルタスの隣に座るクラウもこちらを見つめている。何があるのだろうと考えているとオルタスが再び話し出した。

「ハジメも5歳になったわけだし、色々話しておかなきゃいけないこともあってね。もちろん今すぐ全部理解しなきゃいけないわけじゃない。わからなかった事はその都度詳しく教えるからいつでも聞いてくれて構わないからね。」
「はい。」
「よし、それじゃまずは・・・オレ達の事から話そうかな。まぁ正確にはオレとハジメなんだけど。」

どんな事言われるのか緊張して聞いているハジメ。オルタスは普段と全く変わらない口調でハジメの目をじっと見てゆっくりと話す。

「オレとハジメは人間じゃない。魔人って言われる種族なんだ。」

いきなりのカミングアウトに思考が止まる。だがオルタスはそのまま話し続ける。

「まぁ見た目は人間とほとんど変わらないしね。たぶん言われなきゃ気付かなかったんじゃないかな。でも間違いなくハジメは魔人だよ。その眼がその証拠さ。」

そう言うとハジメの眼を指さす。指を差されて我に返るハジメは聞いた事を頭で繰り返し理解しようとする。そして疑問に思ったこ

とを口にする。

「母上も同じ眼なのに違うのですか？」

「お、いい質問だね。さすがハジメだ。」

そう言って一人でウンウン納得しているオルタス。クラウの先を促す視線に気付いてその答えを話す。

「クラウは元人間といえばいいかな。魔人の特徴に＞魂の共有＜というのがあってね。愛する人と一生添い遂げる為に魂を一体化させて分かち合うことができるんだ。これをすると寿命の長い方、つまり魔人の寿命に合わせられるんだよ。普通に生活してれば間違いなく魔人の方が長生きするからね。」

そう言ってオルタスはクラウを見る。クラウはニッコリ微笑んでハジメを見つめる。

「共有すると相手が違う種族の場合目が魔人と同じ色になる。魔人はまたちょっと特殊な目なんだけど。まぁその辺は後にして。あと共有できるのは一生に1回だけ。だから愛する人と一生を添い遂げる為なんて言われてるんだね。なかなかロマンチックな種族だろ？さて、この辺まででなにか質問はあるかい？」

突拍子もない話の連続でついていけなくなりそうになるが、とりあえずそういうものなんだと無理やり理解して気になった事を聞く。

「魔人は寿命が長いって言ってましたが具体的にどれくらいなんですか？」

「あ～魔人の方が寿命が長いって言い方はちょっと違うか。正確には寿命がないんだよ。」

「は？」
「ある程度歳を取るとピタリと成長が止まってね、あとはず～～～っと歳を取ることはない。でも死なないわけじゃない。怪我や病気が原因で死ぬこともあるし、あくまで老衰することがないってだけだね。あ、老衰ってのは歳を取ってお爺さんになることだね。」

それでも十分すぎるだろう！と思わずツッコミを入れそうになるのを堪える。さらにオルタスは付け足す。

「あとこれがとても重要なのだけど＞魂の共有＜をした後に自分か相手が死んでしまうと同時に死んでしまう。共有しているのだからね。だからもしハジメが＞魂の共有＜をしたら自分が死なないようにする上に相手をしっかり守らなきゃいけないよ。してなくても女性を守るのは男として当然の義務だけどね。」

そう言ってニッコリ笑顔でグッと親指を立てるオルタス。話の内容はハードな気がするがオルタスのおかげで重く受け取らずに済んだのはハジメにとってありがたかったかもしれない。

「魔人の目が特殊というはどういうことですか？」
「あ、それはね、実際にやってみるのが早いね。」

そう言うとオルタスはテーブルの上に手を出す。すると手から紫色に光る靄のようなものが出て掌の上で渦巻いている。回転が速くなったかと思ったら火が出て燃える球体になった。ハジメは初めて見るおそらく魔法であろう現象に驚き、オルタスの顔を見てさらに驚いた。オルタスの目が淡く紫色に輝いていた。

「こんな感じで魔力を使うと体の中を魔力が巡り目が輝きだす。使う魔力の量が多ければ多いほど輝きが増すって仕組みかな。オレ達

の姓がアメジストって言われるのもこれのおかげだったりするんだけどね。」

「なるほど。」

前に初めてオルタスに姓がアメジストだということを聞いたとき疑問に思った事だった。前世の記憶で紫色の宝石というのはなんとなく覚えていたがなぜそんなものが姓になったのか。それが魔人特有の目からきていることに納得するハジメ。

そして話を聞いてる途中から聞こうか迷った質問を思い切って聞いてみることにした。今なら並大抵のことは驚かない気がしたので。深呼吸してから疑問を口にする。

「父上と母上って何歳なんですか？」

「む、ハッキリとはわからないけど３００歳くらいかな？」

「それくらいかしらね。」

そう言ってお互いを見つめて笑っている２人を見て眩暈を起こしそうになるハジメだった。

第3話　5歳児が聴く自分の種族について（後書き）

ちょっと短いかもしれませんがここで区切った方がいいような気がしたので。
ここでやっと姓を公開。出すの忘れてたわけではないです。決してないです。でも出す機会あってよかったですマジで。

第４話　５歳児が聴く核人についてと明日からの話

「さて、自分達がどんな種族かというのはこれくらいかな。他にも色々あるけどその辺は追々話すとして。」

オルタスが一度話を区切り次の話を切り出す。ハジメはまだ自分の事で知らない事があるのかと気を引き締めるがふとオルタスの斜め後ろにラウが立っていることに気付く。こちらの視線に気づきラウは笑顔で軽く頭を下げてきたのでどうしたんだろうと首を傾げる。オルタスはそのやり取りを見た後口を開く。

「そう、ラウの事だね。ラウも人間とは違うんだ。」

「魔人なのですか？」

「いやいや、ラウは魔人じゃないよ。核人（かくびと）と言って、うーん、どう説明すればいいか。普通の生き物とは全く別って言えばいいのかなぁ。魔晶石という自我を持つ石があってね。魔晶石は魔力を蓄える性質がある。ある程度蓄えるとその魔力で体を構成して生き物の様になるってわけさ。」

「えっと、じゃあラウのあの姿は魔力の塊ってことですか？」

「そういうことでございます。坊ちゃん。」

そう言うとラウは右手を胸の高さまで上げると指先から蒸発したように消えていった。ハジメの驚いている顔を確認すると反対の手でサッと隠し次の瞬間には消えたはずの指が元通りになっていた。マジックの様な仕草をするせいでどっちなのか混乱しだすとラウは説明を始めた。

「核人の体は魔力そのものですので魔力さえあればいくらでも再生は可能でございます。大まかな外見はそれぞれの核によって決まっ

てますが服などの部分は個人の趣向とお考えくだされば よいかと。魔力をどうやって蓄えるかですが、漂う魔力を吸ったり、先ほどの様に食事を取って食べた物を魔力に換える、後は仕える主に魔力を分けてもらう。そうしたことで蓄えております。」

「仕える主？」

「はい、核人は自分の力だけで変化できるほど魔力を蓄える事はほとんどございません。ですので変化できるほど魔力を注いでくれた人物に感謝し仕える事が多くございます。核人と主の相性など様々な理由でそうではない場合もありますが。」

「ラウは父上に感謝して仕えてる？」

「はい、この大恩は返しきれないものと思っております。」

「いやいや、大げさなんだよラウは。」

照れたオルタスは頭を掻きながら手を振る。そんな2人を見て笑顔になるハジメとクラウ。

「ラウも長生きしてるの？」

「そうですね、石ですので歳を取ることはございません。主やクラウ様と同じくらいとお考え下されば よろしいかと。」

そう言われたが見た目は両親が２０代後半くらいなのに対してラウは４０歳くらいなので同じは無理があるだろうと思ったが見た目が実年齢に全く関係ない事を考えたらなんとも言えないなと考えを改める。

「クロフレイアも同じくらい生きております。彼女も核人でございますよ。」

「え？クロも？馬だけど？」

「核人という名前ですが、変化後にどんな生き物になるかは千差万別でして。馬であったり、中には昆虫のような者もおります。生き

物ですらない者もいるとか。私はまだ見た事がございませんが。」
「な、なんでもありなんだね・・・。」
「あと核人にはそれぞれ固有の特技がございまして。」

そう言うとハジメの方へ来て掌を出す。そうすると掌の上に黒い円が出てきてそこからカップが出てきた。赤ん坊の頃から見ているマジックかと思ったが、いつもはサッと反対の手などで隠した瞬間に出てたりしていたので実際掌から出てきているとは思ってなかった。3人分のカップを出して両親とハジメの前にに置くと今度はポットを出す。カップに注がれる紅茶からは湯気が立っていた。注ぎ終わるとポットを掌に載せる。また黒い円がでてポットが中に入った後円が消える。

「こういうことでございますね。」
「え～っと・・・どういうこと？」
「これは失礼しました。では詳しく説明を。私の特技は収納と申しますか、別の空間に物を出し入れできるのでございます。どれだけでも物は入りますが、空間に入れたい物が掌に載る事と生き物以外という条件がございますね。空間に入っている間は時間が止まっているので劣化したり腐ったりすることもございません。」
「だから紅茶も暖かかったんだね。」
「そういう事でございます。」

ラウがニコリと頷く。空間に入れた物を忘れちゃうことはないか聞くと、空間の中に何が入っているかはちゃんと把握しておりいつでも自分の出したい物を出せるということだった。

「クロも特技あるの？」
「あるにはあるのですが、クロフレイアの特技はあまり生活向きではないと申しますか・・・。」

「へぇ、何だろう。教えてよラウ。」

ファンタジー特有の事に子供の様に（実際子供だが）興味津々なハジメに申し訳なさそうにラウは口を開く。

「クロフレイアの特技は自分を中心に周りを火の海に変えることでございます。」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

思いもよらない特技にハジメは笑顔のまま固まってしまう。

「もちろんクロフレイアは大変賢い馬ですので無暗にそんな特技は使いません。坊ちゃんを怖がらす事もしないのでご安心下さい。」

「う、うん。」

ビックリはしたがその特技を聞いてクロが怖いとは思わなかった。クロと今まで接してきたが怖い思いをすることはまったくなかった。話しかけると理解しているように鳴き声を出すし、ハジメを見るクロの目も優しい目をしていたのでハジメはクロの事が好きだった。

「よし、それじゃラウとクロフレイアの話はこの辺にして次の話をしようかな。」

ずっと黙って聞いていたオルタスが口を開いた。ラウはスッとオルタスの後ろに下がる。それを確認するとオルタスは話を始める。

「まだハジメは5歳だし、家と村の中くらいしかいることないけど

それ以外の所はとても危険な所というのはわかるね？。」
「はい。」

これはずっと前から言われいている事だった。家や村の周辺は比較的安全だが、森の中にはモンスターと呼ばれる生き物が沢山いる。実際村人が森に入ってケガをしたというのも聞いていたし、定期的に村人数人で狩りをして食糧や生活用品の材料にしているのも知っていた。狩ってきたモンスターを見たが鋭い牙や爪を持った熊の様なものもいて子供なんて到底勝ち目のないものだった。

「だからハジメには明日から鍛錬を積んでもらおうと思ってるんだ。あ、体を鍛えて強くなろうってことだね。」
「強く？」
「ハジメも男の子だ。みんなを守れるくらい強い方がいいだろう？」
「はい、そう思います。」

転生前は体を鍛えるなんて特に考えてもいなかったがそれは必要のない生活を送っていたせいだ。だがここはそれでは済まない。自分の身にいつ危険が訪れるかわからないし、周りの人々にも同じ事が言える。5歳まで暮らしたが両親はもちろんラウやクロ、村人達もいい人ばかりで愛着があり大切な人達だとハジメは思うようになっていた。

「よし、それじゃ鍛錬の内容だけど魔法と武器の扱いと色々な戦闘技術、あと体力作りかな。それに勉強もしなきゃいけないね。」
「いっぱいありますね・・・。」
「魔人族は魔力はずば抜けてるのだけど体力とかは普通の人間くらいかそれ以下だから武器を使った接近戦はあまり得意じゃないのだけどね。実際オレはそういうのはからっきしだし。」
「そういうものなのですか。」

そう言われたが5歳のハジメにはいまいち実感がなかった。

「たぶんハジメは魔人と人間のハーフだから普通の魔人より体力は付くと思うんだ。それに成長できる間に鍛えておけばそれを維持できるだろうしね。オレは成長期にそんなに鍛えられなかったから。」

オルタスはそう言うと昔を思い出したのか苦笑いをした。

「で、誰が教えるかなんだけど魔人の使う魔法は人間のとはちょっと違ってててね。これはオレしか教えられないから魔法担当はオレだね。で武器の扱いなんかは村のドルガンだね。彼は村の子供達にも教えてるからそこで一緒に習うからね。」

ドルガンは村の警護をしている人で３０歳くらいの男。肌は日焼けして浅黒く、身長は１８０ｃｍを超え、一見怖そうだが愛嬌のある顔をしており豪快な笑いがピッタリで村では人気者だった。体は鍛えられていて色々な戦闘技術を知っていることから子供や若者相手に村で道場を開いていた。道場と言っても建物があるわけではなく村の隅の空地でやっているのだが。村の子供達とは村に行ったときよく遊んでいるので一緒にやると知って嬉しかった。

「毎日道場があるわけじゃないからそれ以外の日はラウに鍛えてもらおう。」

「ラウ？」

「私も人並み程度には戦う技術はありますのでご安心ください。」

ラウが戦うイメージはまったくなかったので首を傾げるとラウはそう言って一礼した。

「それで最後の勉強担当はクラウだね。」

がんばりましょうねとクラウが微笑むが、勉強と聞いて高校生時代の勉強を思い出しちょっと敬遠したい気分だったが自分が5歳児だということを思い出し心の中で苦笑した。

道場が3日に1回午前中にあるという事なので父とラウも3日に1回午前中にやることになり、クラウとの勉強は2日に1回午後にやることになった。明日は道場があるので父と一緒に朝村に行くことになった。

第４話　５歳児が聴く核人についてと明日からの話（後書き）

家政婦以外人間じゃなかった。という話です。
次回は新しい登場人物が何人かでてきます。詳細はこれから考えるのですが。

第5話　道場と教室での初日のやり取り（前書き）

２０１１／１２／２４　サブタイトルに「第〇話」を付けるようにしました。

第5話　道場と教室での初日のやり取り

［ドルガン道場］

次の日の朝、オルタスと共に村の隅にある空地へ向かう。既にそこにはドルガンと数人の子供達がいた。

「お、来なすった。村長おはようございます！ハジメおはよう！」
「やぁ、おはよう！今日からよろしく頼むよ。」
「おはようございます。ドルガンさん。」
「おっと！ハジメ、オレの事は師匠と呼んでくれ！」
「よ、よろしくお願いします師匠。」
「ダッハッハッハ！よろしくな！」

そう言ってドルガンはハジメの頭をガシガシ撫でる。ドルガンは元々冒険者として各地を放浪していたが、１０年ほど前に村人のポメラに一目惚れ。何度も通ってポメラの心を射止めそれからは村に住んでいる。「冒険者としてなかなか優秀だった」と本人は自慢しているが真偽は不明。だが狩りや警護などの知識はとても高く今では村の狩猟団のリーダーで警護主任でもある。その合間に子供達に狩りの仕方や武器の扱い方などを教えて次世代の教育をしている。ちなみに師匠というのは最初に教えていた子供達から言われるようになり本人もまんざらではなかったのでそれ以降師匠と呼ばせるようにしている。

「お、ハジメじゃん！」
「あ、ほんとだー。」

ハジメの姿に気づいて子供たちが近づいてくる。

「おはよヒルナンにヒルダ。レットンさんにトナイにエルレアもおはよう。」

「よう、ハジメ。」

「おはよう、今日から一緒なんだね。」

「おはよう、ハジメ。」

最初に走ってきた2人はヒルナンとヒルダ。2人ともモルヒラの子供でヒルエの弟と妹。ヒルナンはハジメと同い年。短髪で体格も良くわんぱく小僧がピッタリ合う子供だった。村の子供の中でも一番ハジメと仲が良かった。ヒルダは1つ下でヒルエに似ておっとりした感じがある。ちなみにヒルダは見学しているだけで参加はしてない。運動が得意ではないらしく暇だから見に来ているだけだった。レットンは11歳で竜人族と人間族のハーフ。顔は人間だが体に鱗で覆われている箇所がいくつかある。この道場では先輩のお兄さんとして子供達の練習相手や簡単な指導もしている。トナイは人間族の子供でハジメの1つ上。ハジメやヒルナンより少し背が高く、落ち着いた性格で子供達の中ではリーダー的な役割をすることが多い。エルレアはエルフ族の女の子で5歳。あまり感情を表に出さないが微妙な表情の変化をハジメ達は理解している。

道場に通う理由はそれぞれで、ヒルナンは戦えるのがカッコイイから。レットンとトナイは親が狩猟団に入っていて自分達も入りたいと考えているから。エルレアは薬草などいろいろな素材を収集したいからだったりする。

「ふっふっふ、オレの必殺技の餌食にしてやるぜ！」

「道場入って半年で必殺技覚えられるのか？」

半年前に道場に入ったはずのヒルナンの発言に疑問を持つハジメ。そんなハジメにヒルナンは自信満々で答える。

「去年オレが編み出した！」

「うわ、道場関係ねぇ！」

「おいおいヒルナン、ハジメが来たからってはしゃぎ過ぎるなよまた師匠に怒られるぞ。」

「ぐ、気を付ける。」

「まぁ怒られたら笑ってやるから安心しろ。」

「なんだとこのやろうっ！！」

ヒルナンがハジメに掴み掛るのをレットンとトナイが苦笑しながら止める。いつものやりとりなのでヒルダもエルレアも笑って見ていた。ちなみにハジメが丁寧な言葉使いをするのは両親や目上の人くらいなもので普段は軽い口調に変わる。礼儀作法を教えたラウもそこまで徹底しなかった。ラウから話し方を教わりだした頃は世界中こんな馬鹿丁寧な喋り方をしなければいけないのかとゲンナリしていたハジメだったがラウの使っていた教材が『貴族の世界のマナー　子供編』という本だと知り説得して普通に喋るようになった。両親に対しては今更変えられないのと目上の人に敬語は当然なのは前世からのハジメの性分である。５歳でそれができるのは珍しかったりするのだが。

「それじゃハジメ、がんばるんだぞ。」

「はい。」

「任せておいてください！村一番の男にして見せますよ！」

自信満々なドルガンを見て笑いながらオルタスはその場を離れていった。

「よーし、それじゃみんな集合・・・ってもう集まってるか。知ってのとおり今日からハジメも一緒に鍛錬を行う。道場の中ではみんな平等！村長の息子ってのも関係なしだ！。」
「「「はい！」」」
「元々気にしたことないし大丈夫だって。」
「お前はもうちょっと気にしてもいいんだぞ？」
「誰が気にするかぁっ！」

みんなが返事する中またいつものやり取りが始まり結局道場入門直後２人して怒られるのであった。

「・・・とにかく、まずお前らは基礎体力を付けるとこからだ。体力こそがすべての土台だからな！」

この日から体力を付けるべく筋力トレーニングや走ることをメインにやることとなった。遊ぶのを踏まえつつだったのでそれほど苦になる事もなかった。

［カッコイイ村長Ｎｏ．１のオルタスが教えるステキな魔法教室］
（命名オルタス）

「さ、というわけで今日はオレと魔法の勉強だ！」
「よろしくおねがいします父上。」

ここはハジメ達の住む家の庭。庭の大きさは広く、テニスコートくらいの大きさはある。「必要ならもっと大きくもできるのだけどね。」とオルタスは森を指さしていたが今のところ十分な広さだった。

「ああ、よろしく！さて、とにもかくにもまずは魔力のコントロールからだね。それができないと先に進めないので早速やっていくことにしよう。まず手を前に出した掌に魔力を貯める感じで集中する。そうすると掌にこんな感じでモヤっとした塊が出てくる。これが魔力だね。まずここまでやってみよう。」

「はい、わかりました。」

オルタスと同じように手を前に出し掌に集中する。すると体の中を何かがゆっくり巡っている感じがした。その何かを手に集めるイメージで集中を続けると掌に薄ら魔力がにじみ出てきた。

「お、さすがオレの息子！呑み込みが早いね！！さぁ、この状態で鏡を見てごらん。」

そう言うとオルタスはいつの間に持っていたのか手鏡をハジメに向ける。覗き込むと黒かった眼が薄らと紫色に輝いていた。注意してみないと気付かないほどだがその変化にハジメは改めて自分が魔人なのだと実感した。

「では、次は他の部分に魔力を集めてみよう。やり方は一緒だからね。」

言われた通り集中する場所を変えればそこに魔力が溜まって靄のようなものが出てきた。頭から靄が出した時はカッコ悪いなと思ったが練習なので我慢した。オルタスはそれを見て「オレもこんな感

じだった。やっぱ面白いなこれ。」と笑い出したので人前でやるのはやめようとハジメは思った。

「さて、コントロールは日々練習すればもっと早く正確にできるようになるから練習あるのみだね。」

「父上に比べたら出ている魔力が少ないのですがこれも増えるのでしょうか？」

「あぁそれはね。単純にハジメが子供だからだよ。成長に合わせて使用できる量も所持する魔力の上限も増えていくだろうね。」

「よし次は。」とオルタスは2つの石を取り出した。野球ボールくらいのゴツゴツしたただの石のようだが2つは色が違った。

「これは魔力検石（けんせき）と言ってね。自分の消費する魔力の最大量と所持する魔力がどのくらい減ってるかを調べられる石なんだ。これで目安を立てることで魔力切れを防げるってわけだね。あくまで目安だけど。こっちの白い石の方が消費量を測れて、黒い石の方が所持する量の減り具合を見れるんだ。まぁ試しにやってみるね。」

両手に石を持つとオルタスは白い石の方に魔力を込める。そうすると白い石は電球のような輝きを放ち出す。

「こんな感じで込められた魔力の大きさに合わせて輝きが変わるわけだね。それでこちらの黒い石を見てごらん。」

黒い石の方を見ると若干色が薄くなっていた。

「こちらは魔力が減るのを感知すると色が薄くなるんだ。持ってる人の魔力が0になれば真っ白になる。まぁそうなると魔力切れで倒れちゃうから本人は確認しようがないけどね。ちなみに魔力切れに

なると場合によっては命に係わるから気を付けてね。」

そう言ってオルタスは「ハッハッハ」と笑う。命がけだったりするのかこの検査とハジメは少し緊張した。

「まぁ消費する最大量が所持する量を上回るなんてないから大丈夫さ。魔力切れになりかかればすぐ自分で気付くしね。」

オルタスは石をハジメに渡す。ハジメは緊張した面持ちでそれぞれの石を手に持ち白い石の方に魔力を込める。白い石がじわりと輝くのを確認できた。それを確認した後黒い石の方も見てみる。だが黒い石はまったく変化していなかった。それにはオルタスも真剣な顔になる。ハジメは問題が起きたのかと変な汗が出てきた。

「これは・・・・どういうことだ。まったく減ってないのか？」

「減ってない？」

「うーん・・・。ハジメもうちょっと続けてみて。危なくなったら止めるからね。」

「はい、わかりました。」

それから３０分ほど続けたが黒い石はまったく変化がなかった。それを見ながらずっと考えていたオルタスが口を開く。

「ふむ、やっぱり減ってない。消費量より回復量が上回ってる、かな。」

「回復量ですか？」

「うん、普通は魔力の回復には時間がかかるんだ。０に近い状態で全快まで回復するならオレでも半日近く休まなきゃいけないくらいにね。ハジメの場合はたぶん常に回復し続けてるんじゃないかな。どのくらいの回復量かはわからないけど今のハジメの消費量では減

ることがないってくらいだろうね。」
「珍しい事・・・なのですかね？」
「ん～珍しいというか初めて見たよ。３００年生きてきたけど初めてだ。」

自分が規格外だと知り困惑するハジメを見てオルタスは安心させるように笑顔でハジメの頭を撫でる。

「まぁ魔力切れの不安が無くなったってだけさ。ちょっとラッキーくらいに考えておけばいいよ。」

オルタスの笑顔を見てハジメの顔にも笑顔が浮かんだ。それを見てオルタスは思い出したように注意点を教える。

「そうそう、魔力切れの不安がないからと言って魔法が使い続けられるわけじゃないからね。集中力や平常心、色々な要素も魔法には必要だからその辺も鍛えていかないとね。」
「はい！」
「よし、いい返事だ！」

その日の晩オルタスが話したことでハジメの能力をクラウやラウも知る事になった。どんな反応するのか不安だったが2人とも驚いていたのは最初だけで「さすがハジメ（坊ちゃん）。」で納得した。楽観的な家族だなと思ったがそんな家族の反応が嬉しかった。

第5話　道場と教室での初日のやり取り（後書き）

話が思ったより長くなりそうだったので2つに分けました。ハジメの能力は魔力高速回復みたいな感じですかね。チートなのかな・・・地味ですね。
後半も早めに作れるよう頑張ります。

第6話　講座と勉強会での初日のやり取りとその後

［ラウスペムスの体術講座］

「さぁ今日から坊ちゃんには体術を学んでいただこうと思います。武道ですので礼儀作法も合わせて教えさせていただきます。」

「よろしくお願いします。」

ハジメはそう言って一礼する。それを見て頷き「こちらこそよろしくお願いします。」とラウも一礼する。

「さて、なぜ体術かといいますとドルガン君から狩りや武器の扱いを学んでいくわけですが常に武器を使えるわけではございません。狭い場所での戦闘は武器を振れなかったり、街中や人の沢山いるところで武器を振り回すことなど迷惑気周りない事ですし、手元に武器がない時に襲われたりする事もないとは限りません。素手で素早く相手を無力化する術を持っているのが一番だと思うからでございます。」

「なるほど。」

そう言われて納得した。モンスターなどを狩るのは精神的にまだ何とかなりそうな気がしていたが（それでも日本の一般人からしてみればかなりハードなものなのだが）、人を武器で傷つけるまたは殺すというのはハジメには荷が重い事だった。だが盗賊など暴力でモノを奪うというものが存在するという話もハジメは聞いていた。日本にもそれはあったが人が人を殺すという事がさらに身近に存在するこの世界では「恐ろしくてやりたくない」では済まなくなる事

が起こり得るのも理解はしていた。

「とりあえず最初の目標はこの辺にしておきましょうか。」

そういうと掌の異空間から物が出てくる。ハジメと同じくらいの大きさの石だった。それをひょいと持ち地面に置く。

「あ、ちょっといい？ラウ。」

「なんでございましょう？坊ちゃん。」

「手に乗る物なら何でも収納できるんだよね？」

「さようでございます。」

「具体的にどれくらいの大きさまでいいの？」

「そうでございますね。手で持ち上げられさえすれば大きさは問題ないですね。今収納されているもので一番大きいものは馬車、でございましょうか。」

「そ、そうなんだ、うん、ありがとう。」

（そういやいつも使い終わると馬車が消えてたけど仕舞ってたのか・・・。）

「それでは」とラウは話を元に戻す。

「坊ちゃんにはこれを目標にしていただきます。」

ラウは石の前に立ち構える。腰を落とし拳を脇の所まで引き「フッ」と吐くと同時に拳を突き出す。ゴォン！という音と同時に石は縦に真っ二つに割れてしまった。ラウがこちらを見たのでハジメは「無理無理！」と首を横に振るしかできなかった。

「いきなりこれをしろとは言いませんのでご安心下さい。鍛錬を重ねればこういうこともできるという事でございます。」

「そ、そうなんだ・・・ラウは誰かから教わったの？」
「いえ、私は本で学んで体得したのでございます。」
そういうと掌から様々な格闘技の本が出てきた。
（本読んでマスターって無茶苦茶すぎるだろっ！）
教科書マスターラウスペムスによる体術訓練が始まった。

［クラウの勉強会］

「それじゃ今日は読み書きと計算。お金の事と種族について勉強しようね。」
「はい、母上。」
家のリビングのテーブルで向き合って勉強を始めるクラウとハジメ。まずは前から少しずつやっていた読み書きと計算の続きから。文章は日本語と同じような構成だったので単語さえ覚えていけば特に問題はなかった。文字はローマ字に近かったが数はひらがなくらいに多かった。計算はさすがに高校生だったので5歳の計算なんて片手間でも余裕がある。最初の頃まったく間違えないのでクラウは喜んでいたが、あまりにサクサク解いていくので教え甲斐がないとふてくされだしたのを見て気を使ってたまにわざと間違えたりしていた。最近は5歳くらい上の子がやる計算をやっている。ちなみに

教材はすべてラウが用意してくれている。ラウは本を集めるのが趣味で異空間には図書館並みに本があるらしい。たまにエルレアなどが本を借りに来ているので実際に図書館になっている。

「それじゃ読み書きと計算はこの辺にしてお金について勉強しましょう。」

そういうとテーブルに数種類硬貨を出した。

「まずこれが銅貨、一番価値が小さい硬貨ね。だいたい街とかでご飯を食べようとするとこれが5枚くらいいるかな。そして銅貨が１００枚でこの銀貨が1枚になるの。そしてまたこの銀貨が１００枚でこの金貨になる。わかるかな？」

（銅貨1枚１００円くらいかな。食事1食約５００円ってとこか・・・。ってことは銀貨は1万円、金貨は１００万円と考えればいいかな。）

「たぶん大丈夫だと思います。」

「うん、そんなに難しい計算を使うわけじゃないから１００枚で次の硬貨1枚と覚えておけばいいわね。」

そこからお金の計算問題をいくつか出され特に問題がなかったので次の話になった。

「次は種族の事についてだね。村の人たちを見てるからわかると思うけど『人間族』の他にも色々な種族がいるの。私が知っているのは『獣人族』、『エルフ族』、『ドワーフ族』、『竜人族』、そして私たち『魔人族』ね。ちなみに『人間族』以外の種族を『亜人』って呼んだりするわ。これは『人間族』が他の種族に対して呼ぶの

がほとんどだけどね。この村ではまずありえないことだけど他の都市や街では『亜人』を差別したりする事があるのよ。とても悲しい事なのだけどずっとそうしてきた人々の考えを変えるのは難しくて、なかなかその差別をなくすことができないの。」

クラウはとても悲しそうな顔をしてそう言った。ハジメもそう言った人種差別がある事は前世で知っていた。だが日本にいてそれを実感する事はそれほどなかった。ただ「世界のどこかでそういう事がある」程度にしか考えていなかったが、今の友人達には『人間族』以外の種族もいる。そんな友人達がそのような迫害を受けるようなら考えるととても他人事にはできないとハジメは思っていた。真剣な顔で考えているハジメを見てクラウは優しく微笑んだ。

「それじゃ、各種族の特徴を教えるわね。まず『獣人族』は顔が動物の顔をしていて、身体能力も高いの。寿命は人間族と同じくらいね。それで『エルフ族』はとがった耳をしていて男性も女性は綺麗な顔をしているわね。寿命は３００年くらいかしら。『ドワーフ族』は小柄で大人でも今のハジメくらいかしら。鍛冶などの物作りが得意な種族ね。寿命は２００年くらい。そして『竜人族』は顔が爬虫類みたいになっていて体も鱗で覆われているわ。でも彼等にトカゲなどと言ってはダメ。これは侮辱になるからね。寿命は２００年くらいかしら。どの種族にも言えるけど寿命はあくまで平均で例外は沢山いるからね。そして『人間族』に比べたらどの種族も人口が格段に低いの。」

『人間族』が主体となっている国や街がほとんどで他の種族が主体になる街は数えるほどしかなく、村でひっそりと暮らしているというのがほとんどだった。

「『魔人族』はどうなんですか？他に村とかはあるのですか？」

ふと思った疑問をクラウに聞いてみるとクラウは困ったような顔をして質問に答えた。

「これは大事な事だからオルタスがいう事なのかもしれないけど、『魔人族』はもう私達しか残っていないらしいの。」

その答えにハジメは驚愕する。世界で『魔人族』は3人だけ。まさに絶滅危惧種もいいところだった。

「詳しくはオルタスも話してくれないのだけどオルタスが住んでた村が小さい頃に滅んでしまって、残ったのがオルタスだけだったらしいの。その後オルタスは世界各地を回ったようなのだけど結局他の『魔人族』を見つけることができなかった。そう聞いているわ。」

「世界各地という事は父上は冒険者だったのでしょうか？」

「ええ、世界を旅していた冒険者だったわ。傭兵団に入っていた時期もあって私達が知り合ったのもその頃ね。」

クラウは昔を思い出すように嬉しそうに話す。

「え・・・ということは母上も冒険者だったのですか？」

「う～ん、冒険はあまりしていなかったし傭兵団に所属していたわけだから傭兵って言った方がいいかしらね。」

顎に指を当てて首を傾げて答える。可愛らしい仕草だが思いかけずクラウのバイオレンスな過去を知ってしまい「絶対に母上を怒らせないようにしよう」と心に誓うハジメだった。

［その後の各訓練の様子］

1年ほど練習を重ねたあたりで村の外に狩りに行く事になった。森は危険なので村を出て少し歩いた草原で獲物を探す。森に比べれば比較的弱いモンスターが多いからだった。それでも念の為ドルガンはもちろんラウや狩猟団のメンバーも数人同行していた。獲物を見つけ周囲に他のモンスターがいないか警戒、安全を確認してそれぞれ目で合図を送り行動に移る。練習を繰り返していたチームでの動きもスムーズにできた。結果、狩りは順調に終わり村へ無事帰還できたが初めて生き物を殺めた子供たちは各々表情が違っていた。達成感を感じて喜んでいるヒルナン、レットン、トナイ。淡々と本と比較しながら狩りで取れた獲物や薬草を吟味するエルレア。ハジメは表面は平常心を保っていたが内心は罪悪感に襲われて震えを抑えるのに必至だった。狩った獲物は小動物だったが刃物で刺した時の感触や事切れる様が脳裏から離れなかった。すぐにハジメの様子に気付いたオルタスに話しかけられそれを打ち明けると笑顔で頭を撫でた。

「生き物を殺める事に何も感じなくなる事が一番恐ろしいことだよ。ハジメは間違ってはいない。その感じたことを心の隅に留めておくんだ。留めた上で生きる為、守る為、いろいろな理由があるだろうけど『やり遂げる』という覚悟を持つことが大切だね。その為には心を強くしなきゃいけない。」

オルタスは真剣な眼差しでハジメにそう教える。ハジメはその言葉を噛み締めた。その後ハジメは少しずつだがその覚悟を持てるようになっていった。

魔法はハジメの覚えも良く、魔力のコントロールもだいぶ上達した。小さな火の玉や電気なども起こせるようになった。

「うん、いい感じだね。『魔人魔法』に大切なのは魔力でどんな事をするかというイメージ。魔力を使ってどんな現象を起こそうとしているのかはっきりイメージしていないとうまく発動しないんだよ。」

「人間の使う魔法はどう違うのですか？」

「あ、そうだねそちらも教えておこうか。」

ハジメは手を止めオルタスの話を聞く。

「人間は魔力で直接現象を起こせない。呪文や魔法陣などの補助が必要な上に自分と相性のいい属性の魔法しか使えないんだ。精霊の存在が必要不可欠だね。」

「精霊？」

「それぞれの属性には精霊がいてその精霊の力を借りて魔法が発動する。呪文で精霊にお願いして魔力をあげる、精霊はその魔力で現象を起こす。そんな感じかな。だから相性のいい精霊の魔法しか使えないというわけだね。ちなみに精霊と言っても姿形が見えるわけじゃないんだ。そういうものがいると考えた方がわかりやすいって考えておけばいいよ。」

「オレにも使えたりするのでしょうか？」

「うん、自分に合った属性なら呪文を唱えればできるよ。各属性の初歩魔法の呪文は知ってるからやってみるかい？」

オルタスから呪文を教えてもらい試してみたが発動したのは火と

風だけだった。水、雷、土は使えなかったが、『魔人魔法』はどの属性も使えるので問題はなかった。

「ちなみに光と闇は特殊でね。『魔人魔法』でも使うことができないんだ。精霊とは別の存在の協力が必要だからね。」

「別の存在。」

「神様とか悪魔とかね。まぁこれも見えるわけではないので存在を確認できないけど。とにかくこの２つは相性がいい人のみ使える魔法だね。」

『魔人魔法』も万能ではなかったがそれでもイメージと必要な魔力さえあれば大概発動できるのはズルいのだろうなとハジメは思った。

（色々面倒なことになりそうだしあまり人に見せびらかさないようにしよう。）

ハジメはこっそりそんなことを考えていた。

ラウから学んでいた体術だったが思いのほか自分に合ってた。前世で刃物などの武器を使った事がなかったのと体術は前世でも馴染みのあるもの（実際にやっていたわけではないが）だったのと人を殺めず無力化できる術というのがハジメに安心感を持たせていた事が主な理由だった。もちろん鍛え上げれば素手でも簡単に人を殺められるのだが。

体術の鍛錬おかげで身のこなしなどもだいぶ上達した。道場でのヒルナン達との組手でも素早くトリッキーな動きで相手の翻弄して

隙を作り攻める戦い方が自分に合ってる気がした。

「体術と剣と魔法を組み合わせて自分の戦闘スタイルを作れないだろうか。」

ハジメはオリジナルの戦闘スタイルを編み出してみようと考えるようになっていた。ドルガン、オルタス、ラウ、と相談しながら少しづつ形になっていった。

ちなみにラウの出した課題「石を拳で割る」はまだ成功していなかった。

勉強会にはトナイとエルレアとヒルダも参加するようになっていた。トナイは今まで読み書きと計算をあまり勉強していなかったからそれをやりたいという理由で。エルレアはラウから借りた本でわからないところをクラウやラウに教えてもらう為。そしてヒルダの理由はいたって単純でトナイが参加しているから。成長していくにつれてヒルダはトナイへの恋心を膨らませていて周りには完全にバレていた。残念ながらトナイには伝わっていないのが周りはもどかしかったがヒルダから「余計なことはしないでよね！」と釘を刺されているのでみんな見守るしかできなかった。

参加していないレットンとヒルナンは「勉強なんてごめんだ！」と断固拒否の姿勢を崩さず勉強会の時間は2人で道場で自主練習をしているらしい。そのおかげか年上のレットンと練習をするヒルナンはメキメキ実力を上げていた。ただし剣術だけ。

そんな日々を過ごしハジメは9歳を迎えようとしていた。

第6話　講座と勉強会での初日のやり取りとその後（後書き）

用語等を『』で囲ってみました。
生き物を殺める事に関してのオルタスの発言は人に教えを説くような事をしたことがないので的を得てない発言かもしれません。正解がなにか・・・難しいですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5166z/

ジュエル！

2011年12月25日02時51分発行